

鷗たゞあまく毒なしかはきとめおもはず物にくるふにぞよき

〔萬葉集一
雜歌〕天皇明○舒登香具山望國之時御製歌
山常庭村山有等、取與呂布、天乃香具山、騰立國見乎爲者、國原波、煙立籠、海原波加萬目立多都、柯恰國曾、蜻島、八間跡能國者、

〔續日本後紀三
仁明〕承和元年二月辛未、是夕當于禁中之上、有飛鳴者、其聲似世俗所謂海鳥鳴。女者、其類數百群、或言非海鳥、是天狐也、宿衛人等、仰天窺望、夜色冥朦、唯聞其聲、不辨其貌焉。

〔日本紀略五
冷泉〕安和元年四月一日癸丑午刻鷗數百群飛宮中、鶴鳴向北往。

〔催馬樂〕紀伊國

きのくにのきのくにや、玄らゝの濱に、眞玄らゝの濱に、おりゐるかもめはれ、その玉もてこ、かせ玄もふいたれば、なごりしもたてれば、みなぞこきりてはれ、その玉見えず。
〔十六夜日記〕はまなのはしよりみわたせば、かもめといふ鳥いとおほくとびちがひて、水のそこへもいる、岩のうへにもゐたり。

かもめ居る洲崎のいはもよそならず浪のかけこす袖にみなれて

〔武江產物志〕水鳥類 鷗隅田川

都鳥

〔下學集上
氣形〕鷗○日本所謂

〔八雲御抄三
島〕城鳥

すみだがはならでも、たゞ京近き河にも有、白鳥のはしあしあかきなり、

〔藻鹽草十
鳥〕城鳥

すみだ河によめりあり、白鳥のはしと足あかき也、堀江にもよめりみなぎはふふなきほふ堀江の河にも、くはみやわだのみ崎にも、みなぎはさらぬみやこ鳥、城鳥聞も玄られぬ音をそなく
〔十六夜日記殘月抄一〕興清按に、都鳥の説あまたあれど、契冲阿闍利、季吟法印、真淵翁などの伊物